

『子どもを褒めて伸ばす』は正しいのか？

2学期スタートから3週間が過ぎました。

朝晩は徐々に涼しさを感じるようになり、運動場での体育学習や、昼休みの外遊びを制限しなければならない日が減ってきました。しかしながら、引き続き「水筒持参」と、「帽子着用」へのご協力をお願いします。

さて、表題の問いかけに皆様はどう答えますか。

様々な考え方があり、絶対的な解はないと思いますが、私は基本のスタンスとして「間違いとは言わないが、正しいとは言えない」と思っています。未熟な子どもには当然のようにたくさんの課題があります。その課題を大人（親・親族、教師、指導者など）が指摘して叱ることを基本とするよりは、「褒める」方が、子ども一人一人がもつ良さを伸ばすことになると考えられます。

人は誰でも褒められるとうれしい気持ちになります。この気持ちが次の行動への意欲づけになることは多々あると思います。

ただし、褒める側が頭においておくことが二点あります。

一点目は、「うれしい気持ちはその時の感情であり、感情は長く持続はしない」ことです。褒められた「経験」が記憶に残ることはあるので、次の言動に良い影響を与える場合もあれば、感情も経験も記憶から薄れていると、課題である言動を繰り返してしまいます。

褒めた側からすると、「この前できたのに、なんで。」となって、結局「叱る」ことは起こりがちです。

もう一点は、「褒めることは評価の行為である」ことです。自身の基準に照らし合わせて、「あなたは私の基準を超えることができた」という判断を伝えています。褒められた側は悪い気はしないものの、評価を下す者、下される者の関係があります。もう一つ付け加えると、「評価者がいて、褒めてくれないと良い言動がとれない」、「評価者が望む言動をとろうとする」ことにつながりかねません。

では、子どもたちにとって（大人もですが）より良い言葉掛けはどうあるべきかですが、私は、『子どもは認めて伸ばす』が最も適していると考えています。「認める」とは、褒めるべき言動をとった目の前の子どもの対して、「あなたのもっている力が、私はすばらしいと思っているのだ」ということを伝えることです。評価ではありません。このことを伝えられた側では、喜びはもちろんのこと、自分の力の自覚や、他者の気持ちを揺り動かしたという経験が得られます。この経験は、しっかりと心に刻まれて、以降の生活場面に生きることが期待できます。

『子どもは認めて伸ばす』ことを、学校家庭地域の大人で実践していきたいと思っています。